

荒縄工房

妹は 鬼畜系

R

あんぱらぐ

サンプル

S
M
小説

妹は鬼畜系R

あんぷらぐ著

荒縄工房・発行



本作品はすべてフィクションであり、実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。また、特定の個人、団体、宗教、人種、性別などを誹謗中傷する意図はありません。

あんぷらぐ

S M雑誌に「仲ゆうじ」名でS M小説を執筆して作家活動をスタート。その後、編集の仕事に携わる。九〇年代よりペンネーム「あんぷらぐど」「あんP」「あんぷらぐ」で小説を執筆。二〇一一年「荒縄工房」より独自の自虐的S M、一人称による告白形式の作品、伝奇S M小説などを発表し続けている。東京在住。

目次

妹が来た！	7
管理	36
修業開始	55
羞恥	78
調教	100
外出	111
見世物	124
鍛錬	137
異物	150
アヌス	162
ブタ野郎	176

ケイ様の回診	407
バカ夫婦	389
拷問ナイト	369
夫婦	337
初夜	315
フイスト	296
仲間	275
タコ踊り	260
拡張	249
名付け	228
映画館	204
肛虐	189

リハビリ	441	
奴隷牧場	461	
トーマンター認定試験	498	
連続処刑	549	
奥付	599	

妹が来た！

「おにいちゃん」

いきなり部屋のドアが開いて、妹のケイが入ってきました。

「眠れないの」

ぼくは固まっています。机の上にはテキストとパソコン。そのパソコンではいやらしい動画が再生中なのです。そして、ズボンをおろして股間をすごいていたわけです。

「あ、勝手に入ってきちゃ、ダメだよ」

つとめて平静を装います。片手でパソコンを消そう、

股間をズボンの中に入れよう、それを一瞬のうちに、悟られることなくやろう。そして兄としての威厳を保ちつつ、かわいい妹に向き直ろう。

そんなことを考えていたからでしょうか。

パソコンを触ったら、消していた音声が最大ボリュームになり、小さい画面で見ていたのがフルスクリーンになって……。

それを両手で止めようとしたら、イスだけが勝手に後ろに転がっていき……。

「おにいちゃん……」

ケイのつぶやきが聞こえます。

ぼくはお尻を剥き出しにして、机の前で中腰になっ

ているのです。そしてティッシュの箱がボカンと間抜けな音を立てて机の端から床に落ちました。

もうダメだ。見られてしまった。

「ふーん」

ケイは、妙に大人びた声を出して、回り込んできました。

「ごめんね、お楽しみだったんだね」

目のすみに、ピンクのパジャマ、熊の縫いぐるみを抱えたケイがちらっと入ったのですが、もう、それだけで、こんな非常事態なのに、あそこがビンビンです。ぼくは彼女を見られません。見れば、射精しちやいそうです。妹に精液をぶっかけたら、ぼくはもう犯罪

者です。

「いいのよ、このことは黙っているし」

彼女は、ベッドに腰掛けました。さらさらの黒髪は、風呂上がりでシャンプーのいい香りがしています。母と同じものを使っています。子どもじゃないもん、が最近の口癖です。

妹といっても、つい先日、ふってわいたように誕生した妹です。父が、父にしてはメチャクチャ色っぽい女性と再婚したのです。結婚式も挙げません。いきなり入籍し、「達夫、再婚したから」と言うじゃないですか。

ぼくを産んだ母は十年以上前に病気で亡くなってい

て、それから男手ひとつでぼくを育ててきた父。ぼくも、男女のことがわかる年ですし、自分だってそろそろ恋人とか欲しいよ、と思っていたわけですから、なんだかうれしかったのです。

なんといっても母は女優か高級クラブのママかと思わせる色気があって、和服、洋服、どちらもビシッと決まります。どうして父がこのようなステキな女性と再婚できたのか不思議ですけども、同じ遺伝子を受け継ぐぼくにも少しは希望が持てたのです。

ただ、「おまえに妹ができるぞ」と言われて、写真を見せられ、ぼくは天地がひっくり返るほどの衝撃を受けてしまいました。

アイドルにそっくり。

すらりとした手足。母親に似た女っぽさ。もう子どもじゃない妹が、いきなり……。

「おまえはアパートでも借りて別に暮らすのがいいと思うんだけど、彼女が同居したいって言うんだよ。気まずくないか？」

「まあ……」

渋々のような表情を作るのが大変でした。

タイプなのです。母もタイプならその娘はさらにタイプ。ぼくが昨年までファンクラブにまで入っていたアイドルによく似ていて、スラリとした足をしたメチャ、かわいい子なのです。

この子が妹になっちゃう！

強烈な妄想が一瞬でぼくを支配しました。

この妹の友だちに、ぜったいかわいい子が一人ぐらいはいるはずです。妹によくしてやれば、いい子を紹介してくれるはず……。

本当は妹といけない関係になりたいけど、それは人としてダメな選択だから、せめて彼女の友だちなら……。

半年ほど待たされて（向こうにもいろいろ事情があるのでしょう）、彼女たちが来ました。ぼくはその間に準備しました。ファンクラブはやめてアイドル卒業、ちよつと賢そうに見える本を中古本の店で適度に買い

そろえ、眼鏡を新しくしてマジメそうに見えるようにし、ヘアスタイルも大人っぽく変えました。

イメージとしては「お兄ちゃん、ここ、わからないの。教えて」と言ってきた妹に「なんだ、こんなこともわからないのか」と偉そうにしつつ、教えてあげる優しい兄、という感じ。

妄想としては「お兄ちゃん、私、お兄ちゃんが欲しかったの。ケイの夢、かなえてくれる？」なんて言われて。「もちろんだよ。どんな夢だい？」と優しく答えると「大好きなお兄ちゃんと一緒にお風呂に入るこ」と！と無邪気でかわいい妹が宣言して、ぼくたちは裸になつてお風呂に……。

いやいや、そんなことは絶対に考えてはいけないんだ。いけないことなんだ。

だから考えないのだ、と毎日のように自分に言い聞かせ……。

それでいてネットで変態な動画を見ては又キまくつていたわけだけど。

先日、同居するようになってから、もうケイに夢中になっている自分がいました。夢にまで出てきます。

「お兄ちゃんのオチンチンが見たいの」

「だめだよ、そんなこと」

「だっていいでしょ、お願い……。私も見せちゃうから」

それで、いつになく発情したこともあって、恥ずかしいことが起きないように、毎晩、念入りに抜いていました。少しでも溜めたら、まずいことをしでかしそうだったのです。

ああ、あのほった。唇。顎。キラキラした瞳。小さな耳たぶ。白いうなじ。ぷっくらした胸。ポンと突き出たヒップ。そして足……。足フェチですから、この足にからまれない、頬ずりしたい、舐めたい……。妄想は果てしなくて。

これまで妄想の対象としていたアイドルはどうせ手の届かない女性ですから、どんな酷い妄想をしてもいいわけで、実際そういう感覚でオナニーもしてきました

た。

だけど、同じ屋根の下にいる妹となると、これはダメでしょ。妄想対象にしては絶対にいけないのです。

でも、ムリだー。

アイドルに対する妄想が、そのまんま、そっくりケイに対する妄想へとグレードアップしてしまった……。抜かずにいられないのです。毎晩、最低二発は……。一発はアイドル。一発はケイ。

「ストレスがあるのよね、わかるわ」

そのケイが妄想ではなくリアルにそこに立っていて、ぼくは抜いているところを見られた……。。

急いでパソコンを止め、ズボンをはきました。

「続けてもいいのに……」

「なに言ってるんだよ、ダメに決まってるだろ」
夜なのです。小声になります。

「そうなの？」

彼女は、なんとベッドにバーンと仰向けになったのです。熊さんが転がり落ちます。

「お兄ちゃん、ストレスあるんだよね。いっぱいストレス、あるんでしょ。わたしもなんだあ」

「え？」

ケイは今度はごろんと横に向き、お尻をぼくに見せつけます。パジャマの柔らかで薄い素材。パンツが透けています。発達した体。もう、普通にセックスをす

ればちゃんと妊娠するし、親に文句を言わせずに結婚だつてできるのです。

だけど、それはぼくの妹……。しかもリアル。シャンプーの香りがするホンモノの肉体……。いや妹。

「まったく変わちやったものね、環境が……」

「ああ、そうだね、確かに」

断固としてズボンはしっかりと穿く。

「お兄ちゃんもそう思う？」

「うん。ぼくだつて、戸惑っているし……」

「ホントに、わかってくれてるの？」

「もちろんだよ」

「だつたら、こっちに來て」

「え？」

「こつちに来て。かわいい妹を慰めて」

バキューン！

達夫、心臓を打ち抜かれて即死。

涎が出ないように注意しながら、気を取り直す。

「早く、自分の部屋へ行きなよ。親に見られたら大変だよ」

「関係ない。お願い、こつちに来て」

しょうがなく、ベッドの横に立ちました。すると彼女は目をつぶっていたのですが、手を伸ばしてきました。その手を握ってあげます。小さく、柔らかく、きれいな指。ぼくなんか、触ってはいけない存在……。

奥付

お読みいただき、ありがとうございました。

二〇二〇年十月刊行 第一版

著作権 あんぷらぐど（荒縄工房）

荒縄工房の情報は下記サイトへ

●ブログ「荒縄工房」

●ホームページ

●荒縄工房 S M 研究室

●今日も上機嫌ってわけないだろ

コメント、メッセージ歓迎。「意見、感想、提案など随時、ブログで受付中。」